

# 六浦

左阿弥作

前

ワキ 都の僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 楓の精

地は 武蔵

季は 九月

「思ひやるさへ遙かなる。く。東の旅に出でうよ。

「是は洛陽の辺りより出でたる僧にて候。我いまだ東国を見ず候ふ程に。此秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候。

「逢坂の。関の杉村過ぎがてに。く。ゆくへも遠き湖の。舟路を渡り山を越え。幾夜なくの草枕。明け行く空も星月夜。鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に着きにけり。く。

「千里の行も一步より起るとかや。はるぐと思ひ候へども。日を重ねて急ぎ候ふ程に。是は、や相模の国六浦の里に着きて候。此渡りをして安房の清澄へ参らうずるにて候。又あれに由ありげなる寺の候ふを人に問へば。六浦の称名寺とかや申し候ふ程に。立ちより一見せばやと思ひ候。なふく御覧候へ山々の紅葉今を盛と見えて。さながら錦をさらせる如くにて候。都にもかやうの紅葉

の候ふべきか。また是なる本堂の庭に楓の候ふが。  
木立余の木に勝れ。唯夏木立の如くにて。一葉も  
紅葉せず候。如何さま謂のなき事は候ふまじ。人  
来りて候はゞ尋ねばやと思ひ候。

シテ詞 「なふく御僧は何事を仰せ候ふぞ。

ワキ詞 「さん候是は都より始めて此所一見の者にて候ふが。  
山々の紅葉今を盛と見えて候ふに。是なる楓の一  
葉も紅葉せず候ふ程に。不審をなし候。

シテ 「げによく御覧じとがめて候。いにしへ鎌倉の中納  
言為相の卿と申しゝ人。紅葉を見んとて此所に来  
り給ひし時。山々の紅葉いまだなりしに。此木一  
本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば。為相の  
卿とりあへず。如何にして此一本に時雨れけん。  
山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより。今  
に紅葉をとめて候。

ワキ 「おもしろの御詠歌やな。われ数ならぬ身なれど

も。手向の為めにかくばかり。旧りはつる此一本の跡を見て。袖のしぐれぞ山にさきだつ。

シテ詞

「あら有難の御手向やな。いよく此木の面目にてこそ候へ。

ワキ

「さてく先に為相の卿の御詠歌より。今に紅葉をとゞめたる。謂は如何なる事やらん。

シテ

「実に御不審は御理り。さきの詠歌に預かりし時。此木心に思ふやう。かゝる東の山里の。人も通は

ぬ古寺の庭に。われ先だちて紅葉せずは。いかで妙なる御詠歌にも預かるべき。功成り名遂げて身退くは。是れ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ。今に紅葉をとゞめつつ。唯常盤木の如くなり。

ワキ

「是は不思議の御事かな。此木の心をかほどまで。しろしめしたる御身はさて。如何なる人にてましますぞ。

シテ

「今は何をか包むべき。我は此木の精なるが。御

僧たつとくまします故に。唯今顕はれ来りたり。  
今宵はこゝに旅居して。夜もすがら御法を説き給  
はゞ。重ねて姿を見え申さんと。

地 「夕べの空も冷ましく。此古寺の庭の面。霧の籬の  
露深き。千草の花をかき分けて。ゆくへも知らず  
なりにけり。く。 (中入)

ワキ歌 「所から。心にかなふ称名の。く。御法の声も松  
風も。はや更け過ぐる秋の夜の。月澄み渡る庭の

面。寐られんものかおもしろや。く。

後ジテ 「あら有難の御弔ひやな。妙なる値遇の縁にひかれ  
て。二度こゝに来りたり。夢ばしさまし給ふなよ。

ワキ 「不思議やな月澄みわたる庭の面に。有りつる女人  
とおぼしくて。影の如くに見え給ふぞや。草木国  
土悉皆成仏の。此妙文を疑ひ給はで。なほく昔  
を語り給へ。

シテクリ 「夫れ四季をりくの草木。おのれくの時を得て。

地 「花葉さまぐの其姿を。 心なしとは誰かいふ。

シテサシ 「夫れ青陽の春の初め。

地 「色香たへなる梅が枝の。 かつ咲きそめて諸人の。  
心や春になりぬらん。

シテ 「又は桜の花盛。

地 「唯雲とのみ三吉野の。 千本の花にしくはなし。

クセ 「月日経て。 移れば変はる詠めかな。 桜は散りし庭  
の面に。 咲きつゝく卯の花の。 垣根や雪にまがふ

らん。 時移り夏暮れ。 秋も半になりぬれば。 空  
定めなき村時雨。 きのは薄きもみぢ葉も。 露し  
ぐれ洩る山は。 下葉残らぬ色とかや。

シテ 「さるにても。 東の奥の山里に。

地 「あからさまなる都人の。 あはれも深き言の葉の。  
露の情にひかれつゝ。 姿をまみえ数々に。 言葉を  
かはす値遇の縁。 深き御法を授けつゝ。 仏果を得  
しめ給へや。

シテ「更け行く月の夜遊をなし。

地「色なき袖をやかへさまし。  
(序の舞)

シテ「秋の夜の。千夜を一夜に重ねても。

地「言葉のこりて鳥や鳴かまし。

シテ「八声の鳥も数々に。

地「八声の鳥も数々に。鐘も聞ゆる。

シテ「明方の空の。

地「所は六浦の浦風山風。吹きしをり吹きしをり。散

るもみぢ葉の月に照り添ひて。唐紅の庭の面。明  
けなば恥かし。暇申して帰る山路に。行くかと思  
へば木の間の月の。く。かげろふ姿となりにけ  
り。